

アンソロジーの発禁詩集

発禁詩集として知られるものには意外とアンソロジーが多い。ことに左翼詩人のものにこの現象は顕著である。

アンソロジーにおける発禁第一号は明治三十九年の『社会主義の詩』であり、つづいて『俗体詩』が第二号である。また明治四十二年に出た『童謡大全』をここに並べてかぞえることもできるかもしれない。

大正に入ってから『日本社会詩人詩集』と『泰西社会詩人詩集』の二冊があった。

このようにアンソロジーが目立って発禁となっているのは、個々の詩の反抗の激烈さに加えて、同じ傾向のものが集積すれば、その度合も強化倍化するという現象のためであろう。

したがって昭和に入ってからプロレタリア詩運動の下で編集されたものには俄然としてアンソロジーの発禁詩集が目立つということになった。その年刊詩集など禁止されなかったものが殆んどないという現象とさえなったのである。それらは作品のテーマ、激烈な発声もさるこ

とながら、その詩運動の母体というべき文化団体、さらには思想・労働など社会的活動とのかかりに於て、必然的な成行ということにもなっていたようである。個々の詩の完成度、作品による反逆性、批判性の問題よりも、それのかかわる政治的思想的分野の強弱とも関係したと考えられる。

昭和に入ってから詩集アンソロジーが十二冊数えられるなかに、アナキストのものは二冊であるにたいし、マルクス主義・ナップ系のものが十冊に及んでいることはこの間の消息を物語っている。このとき「発禁」は文学芸術の分野としてよりも、革命思想的活動の如何による政治的問題として扱われたことが明らかであった。無論明治の『社会主義の詩』の発禁以来、そのことはそれにちがいがなく、昭和になってから、そのことはますますはげしくなった。

『中野重治詩集』や岡本潤の『罰当りは生きてゐる』を納本以前（それははっきりと検閲以前）に、詩集の中味を見ることなしに押収した事実、この上なく見事に現われていた。

また昭和六年に出てひろく販売されていた『ナップ七人詩集』が昭和十六年の日米戦争の時期になって禁止になったことも、この事実につながっている。

昭和のアンソロジーの発禁詩集を一覧すると次のようである。

プロレタリア歌曲集

昭和五年 無 産 社 編

小さい同志(童謡集)

プロレタリア詩集(一九二七年版)

プロレタリア詩集(一九二八年版)

プロレタリア詩集(一九二九年版)

プロレタリア詩集(一九三一年版)

赤い銃火

戦列

無産者詩集

労農詩集

アナキスト詩集

南海黒色詩集

ナツプ七人詩集

昭和六年 榎本 楠郎・川崎 大治 編

昭和二年 日本プロレタリア芸術連盟

昭和三年 日本無産者芸術連盟

昭和四年 日本プロレタリア作家同盟

昭和六年 " " "

昭和七年 " " "

昭和八年 " " "

昭和三年 全日本無産者芸術

昭和三年 連盟 静岡支部

昭和四年 全日本無産者芸術連盟

昭和四年 鈴木 柳 介 編

昭和七年 起村 鶴 充 編

昭和六年 中野 重 治 編

これらの詩集は、いずれも昭和十年以前のものばかりである。大正末期のアバンギャルド詩運動から、革命芸術として華々しく展開した以後の、プロレタリア詩として一時期をわが詩史の上に足跡した時期のものばかりである。今日これらの詩をよみかえしたとき、その時期に、

書く者も読む者も、未来に光明を求めて立ち上ったときの情熱通りには見えぬかもしれない。また表現も古く主張も単純素朴に見えるかもしれない。いかえればプロレタリア詩の時代は去ったというべきなのである。ただその時期に存在して、たしかに人々の胸をゆさぶる力がこれらの詩集の中の詩編たちにあったということは否定するわけにはいかない。何をもってそのことを証するか。

これらの多くが、うすっぺらな、紙質もあまり上等ではなかった印刷であったにもかかわらず、刺激と期待を満身に背負って街頭に現われ、撒かれ、また押収された歴史、彼らが発禁詩集となったことに、それは証拠だてられているのである。

彼らは芸術的文学ではなかったかもしれない。作品であるよりも、よいピラであったのかもしれない。そのような性格をもつことのできたのは、この時代の詩以外に、かつてあったであろうか。時がすぎ、使命を終えて、存在が忘れられることは、彼ら、このアソロジー発禁詩集たちにとって、すこしも不名誉ではない。それこそ名誉であると彼らは知っていたよう。見直せば、貧しく、騒々しく、荒っぽく、ガサガサして、この中の何があのようにわが国の官憲をして、追い求めさせ、禁庄に奔走させたのか、といたたくさえなる。

『プロレタリア歌曲集』

いわゆる詩とはすこし違うこれは歌曲集、そのすこし違うところの歌詞もそのころは禁止されることがあった。

詩——近代詩とか現代詩などとは趣きがちがって、その名が示しているとおり、これは歌曲をあつめた小さな本である。歌を集めた本が禁止されたのは、この歌曲集のなかに、早くから歌うことをとめられていた歌があったからであり、またこのような階級性のつよい歌曲が一冊にまとめられると、その集合のなから抵抗的な雰囲気さらさら生まれるからでもあらう。

禁ずれば歌は忘れがちとなる。だからこんな本が運動のためには必要となる。そんな本だから、出せば「発売頒布禁止」という警視庁印が押される。(という循環がおこる)そうした中で禁じられた歌というものは必ず伝えられねばならない。また伝えられるものである。

このパンフレットのなかに「××の歌」というのがあり、その第一句は「ああ××は近づけり」であるが、誰だってその××を革命と読む。これは明治四十年に平民新聞紙上に幸徳秋水選で当選した築比地仲助の作詞で、添田啞蟬坊が「ああ玉杯」の節でうたいひろめたが、すぐ禁止された。

「××歌」を「××は近づけり」の歌詞で印刷していることは、むしろユーモアであるが、この歌曲集の目的はそれで十分達せられたようである。

その編刊の主旨について編者はこう語っている。

「まぢまぢに歌われている歌声が本書によって幾分でも改められ、正しく知り直され、その統一された歌声として、すべての集會に、示威に、一脈生氣を吹き込むことが出来れば編者望外の喜びである。」

ここに集められた歌は二十六、どれもこれもたたかいた歌といつていい。そのなかで明治を「革命歌」と「富の鎖を解きすてて」の社会主義時代の歌が代表するとすれば、「聞け万国の労働者」の「メーデー歌」が大正を代表する。

明治の「革命歌」と、大正の「メーデー歌」とのちがいは啓蒙期を経て労働運動へと、社会主義運動が現実的な強力化に伴う変化が現われているといえよう。

そして普選法と改正治安維持法によって懐柔と弾圧の両面作戦が用いられたとき、一方に「日本大衆党歌」が生まれて合法の道を歩けば、他方には非合法に追いこまれた運動の激発的な息吹きを伝える「三・一五の歌」「憎しみのるつぼに」や「葬式の歌」などが出てきている。

こう眺めてくると片々たるこのパンフレットにも(その多くの歌詞は今古くさく、曲もほとんどありきたりのものに頼りっぱなしだが)、わが国の解放運動の歴史的浮沈ともなう熱

気と、ただよう哀愁があり、さらにそれ故の回顧的な愛着すらも湧いてくる。

この歌曲集のさいごの頁に「インターナシヨナル」の音譜と歌詞がある。これもまたそのころ全く禁じられたもので、今ひろく歌われているものとは、反訳の歌詞もいくらかちがっている。それもいまは珍しいことである。

立て！ 呪われしもの！

立て！ 餓えたるもの！

正義の焰は

今こそ燃ゆる

過去をば捨てて

奴隸よ 立て！ 立て！

世はくつがえる

無よりすべてに！

この戦いに

集えよ！ 明日は

インタナシヨナル

吾等がもの

なおこのパンフレット編集発行の無産社というのは、堺利彦、近藤栄蔵、山川均らボルシェヴィキの人々の著作を多く出版していたところで、この歌曲集も、そのわが国初期の共産党関係者たちの仕事に重点があつたかに見える。これかあらぬか大正以後のアナキズム系の歌などがここに採録されていないことの、一抹の不足は、そのためのことでもあろうか。

童謡集『小さい同志』

「まえがき」に、こう書いてある。「ちいさい同志たちよ！ おぢさん達は、今日君たちに童謡（うた）の本をおくる。おぢさん達は可愛い君たちのために、良い童謡の本を出したいと、ずいぶん永いこと苦心してきた。——今まではどれもこれも金持の子供の童謡の本ばかりで、さぞ君たちも肩身がせまかつたろうが、もうこれからは大丈夫だ。——」
この冒頭の大まじめな言葉はプロレタリア童謡集と銘うったこの『小さい同志』の刊行のねらいを、余さず語っている。

子供には子供のうたを、というのが童謡（という特殊に子供向けの詩）が考えられた時の目

的であったが、プロレタリア文学の主張が一切の文学ジャンルに浸透するかに思われはじめると、階級の対立的感情を盛りこんでプロレタリア童謡まで生み出された。それは幅がせまく、左翼への弾圧と相まって、大きく羽ばたくには至らなかったが、その中でこの本などは注目される仕事であった。

「君たちのお父さんお母さんたちは、おぢさん達と同じように貧乏だ。そして君たちと同じように、おなかがへって寒さにふるえている。だが、そうした中から、君たちは君たちの童謡を元氣よく歌わなければならぬ。この本は、そうした君たちに歌ってもらおうと思って、おぢさんたちがわざわざ書いたのだ」

このような左翼童謡作家たちの意気込みと「今まではどれもこれも金持の子どもの童謡」ときめつける考え方から、現実以上に貧しき、苦しきが強調され、かえって子供向けの目的にそぐわなくなるまでに非現実な性格が露出してゐる。

このマイナスは戦後二十年の今日では、誰の目にも明瞭だが、この本が出た昭和六、七年ごろは、ここに、新しい息吹きも感じられたものである。

ちんばのちんばの廃兵が、

ぎしぎし、ぎっちこやってきた。

ちんばのちんばの廃兵よ

国のためだとおもったか

うんにゃおいちも×された

もう××はまっぴらじゃ

ちんばのちんばの廃兵よ

みんなが、みんながだまされた

(「廃兵」。松山文雄)

今は当り前のことなのに、その頃はこれ一つで発禁になるに十分だった。義勇奉公、忠君愛国等々の国民道徳の指標にたいして、この童謡集は驚天動地のウタである。しかし、イデオロギーの問題を別とすれば、この本の童謡たちはみな七五調にかたどった古い調子であり、階級闘争主義の幼少年版、だから感性のプロレタリア的な新しさに作者らの目も意識も向けられていないかのようである。まことに困難な問題ではあるが、その点では在来の童謡にこれといって加えたものを持ってなかった。プロレタリア文学一般の弱味と古さが、童謡集の中にも現われていたことは否定しがたい。

カゼフケ

カゼフケ

アカイタコアガレ

シロイタコオトセ

などは、無邪気にも度があるゾといたいが、大人の書いた「童謡」というものの根底的な問題でもそれはあるだろう。

西条八十の「唄を忘れたカナリヤ」が、きれいごとの夢に誘って、子供を現実から目かくししたように、プロレタリア童謡にも逆の目かくしがなかったと言えない。たとえば

憎いこん畜生は××の豚よ

どじょう鬚して犬つれて

のように、である。しかし前者はひろくうたわれ、プロ童謡集『小さい同志』は発禁となったのである。

この『小さい同志』の著者「この本をつくった、おぢさんたち九人」とは、岡一太、米村健、牧耕助、川崎太治、松山文雄、織田顔、武田亜公、伊東欣一、楨本楠郎である。

年刊『プロレタリア詩集』

ロシア革命十周年記念として「日本プロレタリア芸術連盟」による最初の『プロレタリア詩集』が出たのは一九二七年（昭和二年）十一月、その開巻第一頁には次の言葉がある。「時日の急迫が十分の収録を許さなかった。そして何よりもあの検閲の缺が、若干の詩の全部と、収められたものの多数の言葉と行（それは詩に於て最も貴重である）とを削らせずには措かなかったのである。この缺なしに詩が民衆の中へ持ち込まれる日を来らせるために——これがロシア革命の真の記念であらう——」。

そして十一人の詩人の詩が並んでいる。無名氏、坂田算一、橋本すみ、佐藤武夫、三川秀夫、森山啓、中野重治、緒方貞翁、松川三樹夫、林和（李北満訳）、長谷川進。この人数も、四十五頁という詩集も、今から思うとまったく貧弱であるが、当時はまだプロレタリア文学——プロレタリア詩が、ボルシェヴィキ的に武装される過程の時期であった。

わが国の文学史でいえば、その前年まで共同戦線をしていた左翼的な文学運動のなかで、マルクス・レーニン主義の旗がひととき高く掲げられはじめたところである。のちにナツプなどに集結していった人びとも、その目標を自分のために十分あきらかにし得ていなかったその時

期に「ロシア革命十周年記念」ということが、このアンソロジーを編ませたのである。

いま読みかえしてみて二つのことを特に感ずる。とかく左翼の詩といえは前衛的な詩風——
未来派、表現派、ダダ、立体派などの手法が入りまじって大正十二、三年ごろから推しすすめられたものだが、ここにはその形式的な影響がほとんどなく、それにかわって革命への熱情がぶちまけられている。たしかにいわゆる前衛詩といわれるものとは異質であり、それゆえの新しさも古さもここから発して、以後十年間のプロレタリア詩運動の中を流れてゆくことになる。大きなプラスとそれにとまなうマイナスである。

巻頭に無名氏の「プロレタリア」という威勢のよい詩があり、この詩がまずこの詩集を代表するかに見える。プロレタリア詩運動の代表選手森山啓や中野重治よりも、ここではガサツで非文学的なこの詩の、いわゆる戦闘的労働者の発想が、当時のプロレタリア文学運動の傾向をつたえているようである。

てめえ一人に親があると言うのか

てめえ一人が女房子持だと言うのか

てめえ一人が親思いだと言うのか

てめえ一人が女房子を可愛がると言うのか

てめえやおいらが立ったのは

一体誰のためだ。

てめえやおいらが勝つのは何の力だ

卑怯者奴ッ 分ったか

分ったら今から部署につけ

第一警備班だ 同志よ！

(以下略)

この百行をこえる長詩の作者「無名氏」とは、プロレタリア詩では名の知れた小林園夫である。この翌一九二八年のプロ詩集にこの詩が再録されているのは、ロシア革命記念の一九二七年版が発禁になって広くゆきわたらなかつたこと、この小林園夫の詩が当時のプロ詩を代表すると見られていたこと、の二つの理由からであろう。

森山啓が「記念祭——若いロシアに」で

昨日の受難の着物を着た

若いロシアを花嫁と呼ぼう

歴史の朝の舞台をめがけ

彼女に俺達の花束を降らせろ

と歌い出しているのは、彼らしい柔軟な抒情性を示して、中野重治の反戦詩「新聞に載った写真」とともに、今では見ることも稀な、この発禁詩集を飾るものであった。「プロレタリア詩集」は以後数年間、年刊詩集として続けられたが、この第一回の二七年版は質量ともに貧弱の域を出ない。にもかかわらず、これがかなり大きな衝動を与えたことは、そこに世界と日本とが歩んだ歴史があったということであろうか。

一九二八年（昭和三年）の『プロレタリア詩集』は、非合法的な共産党の地下活動を反映して、全体の雰囲気は前年以上に戦闘的になっている。とは言え、詩風にきわだった変化はなく、十二人の詩人による二十二篇の詩が収められた。前年につづく中野重治、森山啓、緒方貞翁、三川秀夫、小林園夫、長谷川進の他に、波立一、西沢隆二、窪川鶴次郎、秀島武、久保田経が新しく加わった、ロシア革命記念の二七年版からちょうど半年後の発行だが、この間にプロレタリア文学の驚異的な進出があったことは、この年刊詩集の充実からもうかがえる。この間「日本プロ芸術連盟が前衛芸術同盟と合同して全日本無産者芸術連盟となった」ことが「はしがき」に記されている。

インテリ出の詩人と労働者側の詩人とを併せて編まれた詩集の中味は、例えば、西沢隆二の「憤怒」のように、

一切の人間をして歌わしめよ
その怒りにまで 呪いにまで
空を焼く焔にまで
農民をして 労働者をして
一切の小市民をして
彼等の苦痛を怒りにまで歌わしめよ！

女工をしてあかぎれの痛みを怒りにまで
巡査をして寒夜に吹きちぎられる耳朶の疼きを怒りにまで
彼等の怒りを呪いにまで歌わしめよ！
彼等の怒りこそ
彼等の胸に烙印するであろう
彼等の胸に方向を決定するであろう

(以下略)

イデオロギッシュなアジテーションをうたうものが主であった。西沢隆二の詩よりも中野重治の「無産者新聞第百号」は、ずっと具体性をもつが、その根本の性格と方向は一つである。

また、森山啓の「松葉杖の廃兵」は、廃兵の兄が船員として死んだ弟の思い出をうたう形で階級的立場をおもるものであった。緒方貞翁の「反資本主義」は、

彼奴等が腹をふくらます為

民衆の反抗を眠らせようとする

金ピカやおかみを算盤玉の桁に入れて

彼奴等の胸勘定ではじき出す

兄弟え

それがあのおそろしい人殺しの戦争なんだ。

(以下略)

と歌い出している。この程度のもが「詩」であったということが、現在からは時代ばなれしたものを感じるが、一概にこれらの詩が出現した意味を軽く取扱ってはならない。このような詩が、純粹詩とかシニユルなどの芸術的な詩よりも、数多くの人びとの胸をうった時代であつ

発禁

三折

十四

たことは否定できない。この詩は高度に文学的ではなかったとしても、これらの詩がはたした生活的政治的啓蒙の意義もまた、見すごしてしまうことはできない。もちろん昭和初めのプロレタリア詩は共産主義的地下活動と相伴って活動したもので、文学自体の独立性とか、詩人の自主的な自覚というようなものは、やがて背離する方向をとるわけだが、しかし当時昭和三年二月には、普選法が実施され、これまで社会主義的思想のすべてが弾圧されつづけた歴史の中で、はじめて無産政党が選挙にうって出たという歴史的時期である。そのころのもっとも左翼的な、もっとも革命的な政治活動とともに、プロレタリア文学があったのであり、プロレタリア詩はその尖端を走っていた。その集約されたものが『プロレタリア詩集・一九二八年版』である。その時から戦中戦後の四十年をへだてて今みれば、この小アンソロジーの文学的粗末さをいうことはたやすいが、このような詩集を生むために費されたエネルギーを、ないがしろにすることは出来るものはない。

プロ詩集一九二九年(昭和四)版は、日本プロレタリア作家同盟編集で、戦旗社から発行された。前年の二八年版が、三・一五の弾圧の中で出されたのに引続いて、この年は四・一六の動揺の中においての刊行であった。幾度転じたプロレタリア文学運動の組織も、ようやくナツプの成立によって、弾圧に抗してかえって羽ばたきをひときわ大きくはじめた。

「誇りとすることは、現に工場にハムマーを振り農場に鋏を押し語るわが労働者農民諸君が、詩におけるその大旗をたかだか掲げていることである。それはわがプロレタリアートの詩の里程標であり、三・一五と四・一六との全国的大弾圧の下に、血にまみれて戦いつつあるわが労働者農民のさながらの姿である。」

と、その意気軒昂とした序言にあったように、二八年版の詩人十三人から一氣に三十一人に急増し、新しく高木進二、重政順平、上村実彦、仁木二郎、宮木喜久雄、朴達、白須孝輔、下川儀太郎、松田解子、南壮造、江森盛弥、三好十郎らの参加がある。

左翼の、政治と文化の両面の活動を反映して、プロレタリア詩も、その取材の面をひろげ、様式も多様に進歩してきていた。巻頭の高木進二の「おいらの春」は、プロレタリア詩の正統たる工場生活をうたいながら、七五調に近い口語詩、これは読ませることを意識したものであり、森山啓の「城西××工場の安さんは／おしゃれもの／パン屋の娘に惚れられた／だが三年前の出来事なので……」「くびを切られた安さんは／愛嬌者／パン屋の娘に捨てられた／だが一年前の話なので……」と書きすすめる「組合の安さん」なども、語り聞かせる、つまり啓蒙主義がプロレタリア詩の一部に座を占めていたことを示している。また「三月十五日に送る」(松崎啓次)などの、弾圧にたいして仲間の協力を訴えるものが多いことも当然であった。

あゝ 石ころのこの俺に

また 鞭の音だ

いくじなし もっとがんばれと

同志のベントツにかわって

心地よく野郎共のぶったたく 尻の音だ。

とうたったその詩の姿が、より戦闘的にはげしく完成されたとき、それは田木繁の「拷問を耐へる歌」として、この一九二九年版を代表する詩となった。官憲の直接的肉体的弾圧に抗する、かつてなかった精神と意志のたたかいの記録である。

また「新労農党結党大会解散命令に抗議す」「朝のデモ」(仁木二郎)などは、政治的直接的抗争の詩というべく、さらに「故渡辺政之輔を悼む」(大谷圭三)は、もう一つの形でたたかいの現場をうたっている。

「夜苅の思い出」(中野重治)、「立毛押えに抗して」(上村実彦)、「シキの娘」(松田解子)などでは、生産の中のたたかう姿勢に詩人たちの目が開かれたことを示し、そこにすぐれた作品が見出され、さらに部落問題、植民地における人種差別の問題、戦争にたいする反対等、当時日本の支配者がその上に安住していた、そしてそれが隠蔽されがちだった諸問題、諸矛盾に向

けて、詩の牙が向けられていたといってもいい。

今日、ふりかえって見るときそれらへの形象の度合は、一、二の詩人を除いては、むしろ低い。下手クソである。だが、洗練された伝統的な詩歌のうつくしさが、ガサツな軍歌の昂揚力に及びもつかないこともあるものだ。ある歴史の時点で、プロレタリア詩集・一九二九年版が持ち得たであろう刺激と感奮は、革命への情熱とからみあつてのことではあつても、たしかにかつてなく文学がなし得た赤い狼火であつた。今日、この小型本の素材さをもつて、そのことを軽視することは出来ない。

この年刊詩集の一九三一年版の序に、編者は自讃して次のように書いている。

「一九二九年以後、一九三一年三月に至るまでの代表的プロレタリア詩が収められている。この詩集には、兄弟諸君の大衆的な進出が目立っており、困難な道を前進しつつある日本プロレタリアートの課題は工場や農村に働いている同志の一層広汎な生活の中に生かされて歌われている。又ここには一九二九年より現在へ至る道すがら、詩人達が詩に関し討論して来た多くの問題に対する実戦的な回答もある。」

弾圧による戦旗社の経営の不安定から一九三〇年版を中止した後だけに、つまりその後の二年間における新しい詩人の進出とそれによる詩的内容の前進と成長には、かなり顕著なもの

があつた。新しくこの年に登場した名には、新井徹、B丸のK、大導寺浩一、橋本正一、伊藤信吉、石井秀、今野大力、今村恒夫、一田アキ、金童斎、長沢佑、上野壮夫らが見え、その後のプロレタリア詩運動の中核となつた人びとが、ここにようやく出そろつた感がつよい。

この前年、一九三〇年末にはプロ作家同盟の指導下に『プロレタリア詩』を機関誌とする「プロレタリア詩人会」が結成され、そこには十をもつて数える同系統の詩誌が統合された。その詩人たちのエネルギーの噴出を裏書きするものが、前記の詩人たちの『三一年版プロ詩集』進出であつたように考えられる。

この詩集が示すはげしい息吹き、それは「革命の前日にある時代」という意識から来ている。それは明らかに主観的にゆきすぎではいたが、プロレタリア文学運動全体の意気込みにはそういうものがあつた。この年刊詩集におけるその現われは、党とナツプを通しての、そのよきな指導に、詩人が自分から進んで身を寄せていったその激しさから生まれた。革命への信頼の懸命さ、そこから新しいプロレタリア詩人たちの詩は生産された。

「革命記念日に」（伊藤信吉）「×□は彼らに」（橋本正一）「母の手紙」（一田アキ）「革命十三

年を記念する」（窪川鶴次郎）「護送車」（村田達夫）「再建への道」（白須孝輔）
これら直接に「革命」の必然への信頼を、じかにうたつたもの他にも、ほとんどその感情を下敷きにして、死、友、同志、血族等についての愛と袂別をうたい、働く者の憎しみと連帯

をうたっている。当時のプロレタリア詩人たちも気づかなかったことであろうが、彼らがこぞってなし得た最大の仕事が、道徳、美観、秩序の問題における、旧来の国家権力によって都合よく統制されていたものへの巨大な反抗と否定にあったということ。彼らは階級的立場からそれを言ったが、そのために詩のうたい方、その中味がかつてなく拡大されたのである。

彼らの目は政治的革命に集中していたために、芸術と生活とにおけるこの広大な改革の方向を自分らが（必ずしも彼らのみではないが）推進したことを忘却しているかもしれないが、四十年を隔たった今、そのことの効果こそはるかに明確である、と言い得よう。厳存する権力權威、既存の道徳と価値観、それをゆさぶり動かした「詩の運動」の意義は、なかなか大きかったのである。

一九二七年、二八年、二九年そしてこの三一年、さらに発禁にならなかったが三二年（プロ作家同盟編と、プロレタリア詩人会編の二冊）と続いた年刊プロ詩集は、同じ形ではその後出なかった。外部からはうかがい知られなかった組織的な、または政治的運動とのかかわりもあったのであろうが、その究明はこの問題ではないだろう。

一九三一年版プロ詩集には、中野重治の「雨の降る品川駅」と、長沢佑の「貧農のうたへる詩」の傑作があり、現在に至ってもその与える感銘はつよいものがある。